

「障がい者スポーツを体験して」

人文学部英語英米文学科

1年 上原 梢



私は、スポーツが大好きなので、冬期スポーツ大会を、いつもの企画以上にワクワクしながら待ち望んでいました。そして、各大学や市民の方々がどれだけ参加してくださるのかということも不安に思っていました。私にとって、実行委員であったのが今回初めてのことでした。そのことで緊張していましたが、責任があるので当然の事と思うように努めました。

スポーツ大会へ向けて、一般の方々の参加募集のために、大きなマンシヨン数件に約七百枚のチラシを配りました。少しでも多くの方々に参加していただけるようにと願いながら、一軒一軒の郵便受けにチラシを入れていきました。すると、数日後に、そのチラシを見てフライングディスクに興味をもった北海道大学の学生三名からの参加の申し込みを受けました。私は、チラシを配ったことも、それによって申し込んでくれる人との関わりが、今まで一度もありませんでした。そのせいもあってか、そのときは物凄く嬉しかったです。この体験を通して、参加の申し込みを受けたときの喜びが大きく、感動し、今まで体験したことのない経験ができました。そして、フライングディスクやゴロ野球を教えて下さった先生方、手話通訳をして下さった方、他にも参加してくださった皆さんの大学生、高校生、一般の方、そして、実行委員のみんなに、大変感謝しています。

今回のスポーツ大会は、「障がい者スポーツを通しての大学間交流」を目

的として行いました。みんながそれぞれにスポーツや会話を楽しみ、交流している姿を見ることができ、実行委員として、嬉しかったです。ただ、大学間の交流というよりも、大学ごとに何となく固まってしまっていたので、そこが残念でした。

私は、今までに、障がい者スポーツというものを体験したことがありませんでした。なので、フライングディスクも、ゴロ野球も、障がい者と共に楽しくできるスポーツとして、とても楽しみにしていました。

スポーツ大会の当日、それぞれのスポーツを体験し、気づいたことがあります。それは、私たちが知っている障がい者スポーツ（フライングディスク、ゴロ野球）だけでなく、他のスポーツにおいても、ルールをその人に合わせることで、障がい者と共にスポーツをすることができる！！というのでした。

日本で正式に公認されたスポーツだけでなく、私たちが作ってあげば、様々な遊びをすることもできるのです。

その例が、最後に行ったドッチボールだと思います。誰かが不利にならないようなルールを考え、あとは楽しむだけです。そのときには盛り上げが必要だけど、十分に楽しめるスポーツではないかと思えます。

今回は、寒い中、70名近くの方々に参加していただきました。とても感謝しています。実行委員のみんなもそれぞれ大変だった事はあるかもしれませんが、何よりも、みんな思い思いに楽しみ、色んな経験ができたことが、私としては本当に嬉しかったです。また、会計を担当したことも、私にとって新鮮な体験でしたし、仕事の難しさがわかりました。実行委員を務め、スポーツを楽しむこともできたし、大変満足できました。改めて、お世話になったみなさんに感謝の意を表したいと思えます。

大学生活一年目を振り返って

社会情報学部社会情報学科

1年 島田 祐亮



いる今日この頃です。

この一年を振り返ってみて、バリアフリー委員会の活動がメインだった気がします。筆記代行やノートパソコンの片付けボランティアといった講義支援していただいたこと、飲み会で盛り上がったこと、CAR部で缶洗い・缶回収したこと、講演会や手話劇などのイベントに参加したこと、バリアフリー委員会の世話人を務められている教職員方との全体会議など幅広い分野で、ときには援助を受けさせていただいたり、ときには主体的になって活動したりとバリアフリー委員会の一員として生活させていただきました。

バリアフリー委員会に入会したのは、入学ガイダンスの初日。教務課で挨拶を兼ねて今後の大学生活について相談に行ったところ、その場に入り込んでいただいた新国教授から「バリアフリー委員会に入ればノートブック等の講義支援者を募集できる」という助言をいただいたのがきっかけでした。それから1週間後、何か困っていることがないか、教授から要望をたずねてきてもらいました。私は当時、講義間の教室移動の合間にトイレに行っていたので、トイレで次の講義の準備をすることも少なくありませんでした。

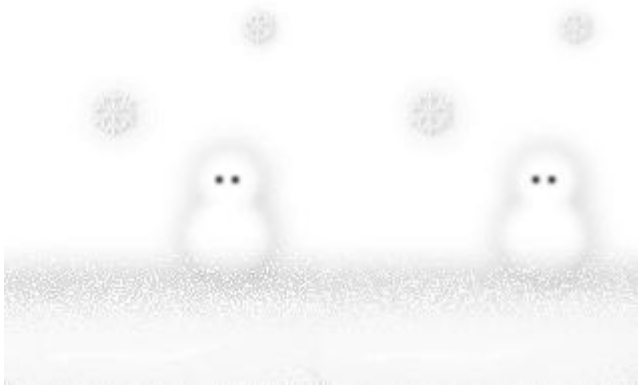
せんでした。トイレに机があれば準備しやすくなると思い、身障者トイレに荷物を置く机を設置してもらいたいと要望しました。すると、2日後に私が当時よく使用していた身障者トイレに、試験的に小中高校で使われている机を設置していただいたとの連絡が来ました。さっそく使用してみると教科書やノートパソコンを置くにはちょうどよい大きさに準備するのに大変便利でした。

それから2カ月後、大学生活に少し慣れてきましたが、相変わらず余裕がなくて無我夢中で講義に全力投球していたある日、バリアフリー委員長から苦悩の末、筆記代行を募集できるとの吉報が入りました。同時期にノートパソコンの片づけを受講している他学生に手伝ってもらおう各講義の担当教授に宣伝していただいたところ、なかなか上手くいわずに悩んでいたところ、私が受講していたある講義の教授から、ノートパソコンの片づけを手伝ってもらおうボランティアを募集してみようかと提案していただきました。ノートパソコンの片付けボランティアと筆記代行を募集していたことにしました。その結果、多くのバリアフリー委員会員が志願していただき、講義が格段にスムーズに受講できるようになりました。また、筆記代行やノートパソコンの片づけボランティア、CAR部の活動を通して友だちができ、大学生活が楽しくなってきました。

そんなふうにして前期が終わり、夏休みも開けて後期に入り、大学生活にだいぶ慣れてきて余裕が出てきたところ、前々から考えていたパソコン検定に挑戦したり、スポーツ大会を企画したりと積極的に活動しました。また、前期よりも部室に行く機会が多くなり、友だちも増えてとても充実した大学生活を過ごすことができました。

この一年を振り返って、とりあえず大学生活に慣れることができたのは収穫でした。今後の大学生活のリズム作りに大いに役立てたいと思います。

また、一年目にして我ながら課外活動と勉学の両立ができたことはとても成功したことだなと思うのでこの経験を糧にしていきたいです。唯一失敗したなと思うことは、まだまだ一生懸命すぎて手の抜きどころがわからなく、すぐ余裕がなくなってしまうがちになってしまふことと、友だちと付き合う機会が少なかったことです。例えば、今でも空き時間があるとだらだらしてしまったり、友だちの誕生会などに参加したくても自分の課題を優先してしまいがちになったりしました。これも自分の時間の使い方がまだまだ上手くないということではないかと思えます。だから、2年目はもっと時間の使い方について工夫していきたいです。大学の勉強はもちろん、検定勉強や手話勉強、読書などやりたいこと、やらなければいけないことはたくさんありますが、それらを通して時間をうまく使うようにするにはどうすればよいか考えていきたいです。



みんな、わがいねえ・・・



2004年 4月 30日 新入生歓迎会

バリアフリー委員会と過ごした1年間

社会情報学部社会情報学科

1年 夕向 智博



BF委員会に入ってからもうあつという間に一年がたった。高校を卒業してはつと気づいたらもう一年の終わりまで来ている。時間が流れている。

私はこの大学に入って本当に良かったと思っている。なぜならば私はBF委員会の方々に助けてもらっているからです。ノートテイクやPCテイクなど講義の内容を書いてくれるのだ。高校の時と比べると大変落ち着いて学習できる環境になっている。高校の時は皆はしゃいでいて授業中何を言っているのかわからないことが沢山ありました。でもはしゃぐのは高校の時ぐらいいと思います。大学は時にはうるさい講義もありますが、ほとんどの講義は皆まじめに勉強していて静かな時が多いのでまだいい方だと思います。BF委員会を通じて理解をしてくれる人が大勢にいますので高校の時よりは気軽にわからない事とかを聞くことができる場所があります。ちよつとは白髪も減ったかもしれないです。

BF委員会の活動を入学した時には全く何も知らなかったです。でも最近わかりはじめてきました。工藤さんや筒井さんがつくりあげてきたBF委員会なので本当にこれからはっきりとした委員会にしていかないといいなという気持ちになりました。はじめはテイカーとの付き合い方がわからなくて色々問題を起こしていました。工藤さんに色々、注意されたりしました。最近はこのように問題もなくなりました。人間関係も少しずつ上手になってきているのかなという実感がありません。

BF委員会には聴覚障がい者だけではなくて車椅子とかに乗っている人もいるのである。それで私は車椅子には今まで関心がなかったのですが、大学に入ってから少しづつ興味を持ち始めました。今までも福祉には関心があったのですが、さらに関心を持つことができました。だから福祉に関する本とかを読み始めました。その福祉に関する本を沢山読み始めたのはおそらくBF委員会に入ってからだと思います。

BF委員会にある手話勉強会に入って初めて手話を習いました。手話を全く知らなかったのです。少し勉強して最近少し上達したかなと思います。ですが、手話ばかり使っていると口話(発音)が下手になりました。高校の時はただでさえ話ができなくて頑張つて話す練習をして上達したのにそれを台無しにしたくないからです。本当にやばいのでこれからは口話(発音)と手話とバランスよく使いたいと思います。

来年のBF委員会は聴覚障がい者2人が入ってくることが決まったのでもっともっと聴覚障がい者の立場を作つてあげられるように頑張りたいと思います。そして車椅子の人のためにもいい環境を提供できるようにBF委員会の人が全員協力し合つてノーマライゼーションを更に磨き上げたいと思いました。そして次に入ってくる障がい者は初めから壁(障がい)ないような環境であるユニバーサルデザインが必要になってくると思います。これからも色々問題が発生すると思いますが、めげないでもっと自分を成長できるようにBF委員会の方々から色々学び、教えてもらいたいと思います。

NEVER GIVE UP 精神で頑張ります。

バリアフリー委員会との1年間

社会情報学部社会情報学科

1年 沖野 友輔



バリアフリー委員会に入って1年近くたとうと
しています。僕は被テイクカーとしていろんな人に支
えてもらってきました。高校の時はみんなと同じよ

うに普通に授業を受けていました。英語の時も立って英文と日本語訳を言
わされたりしました。大事なところやテストに出るところや宿題など重要
なことは教えてくれたり、板書してくれる先生もいました。でもその他で
は特別扱いを受けませんでした。それが当たり前だと思っていました。札
幌学院大学ではノートテイク、2回テイクがあります。大学では高校と違っ
て、教室が広くて板書も高校と比べると少ないので先生の話がわからない
と本当に困ります。講義保障を受けているので、みんなと同じまでは行か
ないかもしれないけど、大体理解できます。またノートテイクや2回テイク
は記録が残るためテスト勉強やレポート作成に時々役に立つことがあります
した。今は当たり前のように講義保障を受けていますが、いろいろ考えて
みるととてもありがたいと思います。ただ1つだけ問題がありました。僕
は韓国語を履修しているのですが、高校まで韓国語を学ぶ人があまりい
ないのでテイクを受ける時先生の話がわからなくて書けなかったり間違っ
て書いたりしていました。これから聴覚障がい者の学生がまた入ってくる
と思います。その時英語以外の外国語を履修した時に困ると思います。そ
の問題は何とか解決して欲しいと個人的に思っています。バリアフリー委
員会に入って、得たことは講義保障だけでなく、人間関係の勉強にもな

りました。高校の時はサッカー部に所属していて、考え方などは先生が決
めていてそれに従うという感じでした。それでケンカしてもみんな考え方
が同じなのですぐ仲直りしたり決められたことをしっかりやったりしてい
ました。しかしバリアフリー委員会に入って、いろんな人と接しているう
ちぶつかったりしたことがあります。その時僕の考え方が全く通用せず、
苦しんだことが何度もありました。今はまわりに合わせるようになりまし
た。もしバリアフリー委員会に入っていなければ人間的に成長できなかつ
たかもしれません。僕の考え方は古典的な考え方でとても堅いのです。で
も最近はやわらかくなってきたと思います。またバリアフリー委員会には
たくさんの方がいます。それでノートテイクや2回テイクを頼んでテイクを
してもらって授業中は話したらいけないけど、話したりして仲良くなった
こともいい面のひとつでした。とにかく友達がすぐできたしいろんな人と
接することができました。誕生日にはみんなに模造紙にメッセージを入れ
てもらって嬉しかったし、韓国に留学することを応援してくれる人もいて、
仲良くしてくれる人は仲良くしてくれました。バリアフリー委員会に入ってい
てよかったと思いました。手話勉強会もあって、高校の時まで手話をあま
り使わなかったのでもあまり知らなかったけど、手話勉強会で手話を学んだ
り普段話す時も手話を使うことで手話が少し使えるようになりました。手
話勉強会にはバリアフリー委員会に入っていない人もいて、その人たちと
も友達になれたりしました。また他大学の手話サークルと交流をしたりし
て、出会いがとにかくたくさんありました。バリアフリー委員会に入っ
ていろいろ得るものがあり、いろいろ学びました。これからもいろんな人が
参加してもっと発展させられたいなと思います。

2004年度

バリアフリー委員会の

活動を振り返って



バリアフリー委員会サブリーダー

法学部法律学科

長谷川 祐也

今年度の活動を振り返ると、「動」というのがピッタリではないでしょうか？そしてリーダー宮町の、集大成の1年間だったと思います。今、思い返すと4月末の新入生歓迎会から、今年1年の成功の「ヒント」が多くあったように思います。まあ、きっかけはみんないろいろだったと思うんです。本当にボランティアがしたいという人、なんとなく興味があつて来てみた人、もしかしたらかわいい子がいるんじゃないかって来てみた人など・・・でもそれも、自らが「動」いてきたわけですよね。40名近くの人が参加し、大いに交流してくれたと思います。その後は、さまざまな講演会に参加したり、テイクで顔を合わせたり、手話勉強会で交流したりと、みんなが仲良くなる様子に、とてもうれしく思つたものです。宮町と2人で話すと必ず、よかつたなあ、よかつたなあ、とジジイのような会話になります。それというのも2003年度のわれわれの活動は、すごく大きな課題を残してしまっていたからです。その反省を踏まえ、さらにリーダー・サブリーダーがしっかりと意思・意見の疎通を行うことによって、他のメンバーとの風通しをよくするようにした結果が、

表れたのだと思います。

7月には、スポーツ大会もありましたね。実際、長谷川にとっては面倒だけど、あれだけやりがいのある仕事はないと思つています。この意思を受け継ぐ次期交流部にも、この素晴らしさを後継していただきたいと心から願つています。ソフトバレー・バレー・サッカー・リレー・・・全員がとても楽しく遊んでいたのが、今でも忘れられません。そして、酪農に負けた悔しさ・・・これも忘れられません(笑)その後の飲み会も、60名近く参加して、自分はしっかりと酔いましたよ。それもこれも、みんなの笑顔があつたから・・・なあゝんてくさい台詞も入れていきましょうか。

夏には合宿もあつたね。高熱をおしてまで行った甲斐がありましたよ。とても真剣に勉強してくれて、さらには夜まで騒いでくれて。朝も眠いながら手話コーラスや劇をやつて。あんなに充実した夏休みは初めてでした。学習部が大活躍し、今でも忘れられない京都の報告の手話・・・前の日はどうなるかと思つたよ。でも、2人が終わった後に見せてくれた表情、そしてみんなからの拍手が、とても印象に残つています。慣れない進行にも戸惑っていたけど、大々成功だったと本当に嬉しかったですよ。

4 大学交流会での手話コーラスの発表もあんなハプニングがあつたからこそ、さらに結束が強まったと思います。まさに全身全霊で指揮をとつてくれた田村さんには、頭が上がりません。冬のスポーツ大会でも、いろんな人の協力があつて成功できました。実行委員のみんな、どうもありがとう。あんな天候の中来てくれたみなさんにも感謝しています。

はじめにも言った通り、やはり今年みんなが積極的に「動」いて、こんな充実した1年間になったのだと思います。しかし、どんなに充実した年でも必ず反省点があります。その反省点を、当事者のみが考えるのではなく、その場にいる人たち、その周りにいる人たちが気づき、協力し、た

だ単なる傍観者でいるのではなく、力を合わせてがんばってほしい。それができるメンバーだと、本当に自慢できるメンバーたちだと、長谷川は負っています。それにどうにか応えてほしいと思います。また今ではいろいろな面で恵まれてはいるけれど、そうでなかった時代に、諸先輩方が築き上げてきたものを台無しにはしてほしくないと思います。

この委員会の発展は、大学の発展ともつながっているし、さらに今、障がいを持っていて、なかなか大学に行きたくても行けないという人たちへの、門の開放をも行っているんだということも忘れないでほしい。ただ目先の困難や、問題だけに振り回されたり、感情的になるのではなく、大きな心で一つ一つに向かってほしいと思います。

最後になりますが、新國先生をはじめとした大学の教員・職員さんにお礼申しあげます。さらに今年卒業する工藤君には、公私共にお世話になりました。お世話しました。これからもいろいろな場面で関わることがありますね。これからもよろしく願います。夕向にはこのバリアフリー委員会をしっかりと守ってもらい、沖野には、韓国で一回り大きな人間になって帰ってきてほしい。島田には自分が中心となり、大学の改善のためにどんどん積極的に活動してほしい、そんな風に思っています。そして、ここまでの発展を、中心になって頑張ってくれたリーダー宮町に、心から敬意を表したい。君がいなければ、この委員会はありえないものです。でも・・・君は長谷川の、永遠のライバルですから！これからもよろしく願いますね。受け継ぐ後輩の皆さんも、立派なリーダーを見習って、この委員会をよろしく願います。今後の委員会の発展を、心から祈願しております。



誰もが大切にされる大学を

教務課

井上 寿枝



はじまりは筒井君との出会いでした。大学で学ぶことを半ばあきらめかけた彼と、どうしたら彼に講義保障ができるだろうかと途方に暮れていた

た私を支えてくれたのは、当時法学研究科の大学院生だった藤懸君と幾人かの学生でした。今のバリアフリー委員会のように、学習や研修も行い、多くの学生たちによって豊かに運営されるとは想像もしなかったことです。障がいがあるなしにかかわらずともに学ぶ（遊ぶ？ 飲む？）ことは当たり前前のことだと思うのですが、残念ながら現状では保障されていないことも多く、当たり前前のことを実現する過程を必要とします。バリアフリー委員会が、ごく自然にこれを楽しくやっているのはなぜでしょうか。

札幌市豊平区に「しらかば台翼クラブ」という共同学童保育所があります。共同学童保育所は、留守家庭の子どもたちが放課後を過ごす所で、親たちが自ら運営しています。私の息子もここに通っています。多くの学童保育所が人手の問題などで受け入れを拒んだり、躊躇したりするなかで、10年以上前から障がい児を受け入れてきました。受け入れ当初はあった親たちや指導員の心配をよそに、子どもたちは障がいのある子をごく自然に仲間として迎え、入り乱れて遊んでいます。大人より子どもたちの方がずっとすてきで、人間本来の姿を見せてくれるのかもしれない、と思えてきます。

こんなエピソードがあります。車椅子で生活するカズヤ君はよくよだれ

を垂らします。大人は暖かく（？）見守りますが、子どもたちは「カズヤ、よだれたらしたらきたないよ」と率直に言います。カズヤ君はそれ以来、垂らさないように努力して、とうとう垂らさないようになりました。決して、できないことではなかったのです。対等な関係で遊ぶ大好きな仲間たちが、カズヤ君の持っている力を引き出してくれたのでしよう。

当たり前前のこと。よけいなものがたくさん染み付いてしまった大人より、ずっと若くて心優しい学生であるあなたたちだからこそやっていける。誰もが大切にされ、その力を発揮できるすてきな大学にしていきましょう。大学の外や社会のありようにも目を向け、学びながら。いろいろなものも染み付いている私もメンバーの一人として、微力を尽くしたいと思います。

このテイク
難しいわね



バリアフリー委員会にかかわって

札幌学院大学学生課

松本 賢彦



私がバリアフリー委員会に参加することになったきっかけは、昨年担当した人文学部の合宿オリエンテーションで3人の車椅子使用の新入生

を迎え入れたことにはじまる。それまで私自身バリアフリーとかボランティアと呼ばれるものに全く素人（今でもそうだが）であったため、彼らはどうやって合宿先のホテルまで案内すればいいか、宿泊部屋はどこに用意したらいいか、様々のことが頭をよぎり戦々恐々としていた。彼らと何度か話し合っても不安は消えなかった。見かねた1人が「きつと大丈夫ですよ」と言ってくれた。彼ら3人と多くの教職員と先輩学生の協力で何とか無事に終えることができた。

しかし私が最も気がかりだったのは、合宿オリエンテーション後の3人の大学生生活のことであった。彼らが学修しやすい環境を整えようといくつか試みたが自分ひとりでは中々思うように捗らなかつた。バリアフリー委員会に参加しようと思ったのはその時であった。

果たして参加してみたものの特に目立った活動をしているわけではないし、相変わらず大した役割は果たしていない。名前だけの「幽霊部員」にならないように、今後はもう少し積極的に動いてみようかと反省している。

バリアフリー委員会に関係する課題の一つとして、大学事務との関係が曖昧であると思っている。学生から寄せられる多様な意見や要求を部署間でたらい回しにはしてはならない。事務の所管を明らかにしてこれらに関わ

る処理を一括して担当するセクションを整備することも必要と思う。しかしそれ以上に、大学職員一人一人が正面から学生をサポートしていくという姿勢を自覚することのほうが重要だ。学生の協力無くして大学の改革は成り立たない。彼らとできるだけ多く時間をかけてコミュニケーションを図りながら要望や希望をしっかりと受け止め、彼らと共に（引っ張ってもらいながら？）大学全体が変わっていく。バリアフリー委員会にかかわってみて、今そう思っている。



メンバーたちへのエール

法学部

曲田 統



バリアフリー委員会に入らないかとお誘いをうけたのは、去年の秋であった。「互いを思いやる」という人間において最も大切な意識の共有がはかられている委員会からのお誘いは、私にとってとても光栄なことであり、喜んでそのお話を受けたのであった。しかし当方の事情により、本委員会に入断念せざるを得ないこととなり、とても残念な思っている。それでも、少しばかり、障がいをもつ方々、委員の方々と交流する機会をいただいたことで、思うところもでてきたので、少し書かせていただきたいと思います。

本委員会に所属する皆については、なにより生き生きしているという印象を受けている。世間ではよく、「今の若者は覇気がない」とか、「無気力だ」とかいう指摘がなされるが、そういった言葉とは無縁の若者達によって、本委員会は構成されている。しかも、手をさしのべることがごく自然にできている。車いすの補助や、スペースの確保、手話による通訳等々、細やかにこなしている。だから私もそれを見習いたいと率直に思うし、最近の若者に疑問を抱く世間の人々には、彼らを見てほしいと訴えたい。

人の生き方を深く考え抜いた道元は、「自」と「他」を変わらぬ存在として見ることの尊さを説いた。哲学者ロールズの思想も、「他者」を「自分」に置き換えて物事をとらえられる存在として人間を理解し、その上で理論展開をはかっている。どの時代においても、「自分」と「他人」は概念上は

切り離されながらも、しかし、現実には両者は重ならない存在であると考えられてきたのである。

にもかかわらず、障がいをもたない人は、障がいを自分とは無縁のこととしてとらえがちである。しかし、そのようなとらえ方は、他者と自分を重ねることのない思考回路によるものであり、思いやりの欠如した社会の種となる。そういう人たちにとっては、自分たちが笑顔であればそれでよく、障がいをもつ人が笑顔にならずとも関係ない。そこには、笑顔を共有しようという、他者とのつながりへの意識は働いていないのである。

世の中は、あらゆる人があらゆる人となりがあつていふことによつて成り立っている。人と人がつながりあつていふ以上、自分の欲するところとは他者も欲するものとして意識しなければならない。本学バリアフリー委員会のメンバーは、障がいをもつ人と笑顔を共有したいとの意識をもつて生きている。この意識こそ、彼らの行動の原点であろう。それによつて幸せが共有されることになるのは、至極当然といえまいか。

障がいをもつ学生と、本委員会メンバーとのつながりは、今後、もっと固いものとなつていくであろう。そして、このつながりは、学内全体に少しずつ広がっていくものと予想している。私は、その過程で、障がいをもつ学生が「サポートする側」に立つ局面がもっと多くなつていってほしいと願っている。すでに、障がいをもちながら学問に打ち込む真剣な姿に、多くの学生は刺激を受けている。つまり、多くの学生がサポートを受けているといえる。障がいをもつ学生をサポートし、障がいをもつ学生から学ぶ。——こういうギブ・アンド・テイクの関係が広く構築されたキャンパスでは、きっと笑顔が絶えないであろう。

「バリアフリー委員会」と

共に過「り」して

04年度学生代表

宮町 悦信



バリアフリー委員会の活動が始まって、早4年の歳月が過ぎようとしています。私が活動に参加してからは、3年目ということになりますが、この3年間で多くの人と出会い、他ではできないようなとても貴重な経験をたくさんさせていただきました。私が充実した大学生活を送れたのも、今の自分があるのも全て、このバリアフリー委員会のおかげだと言っても過言ではないように思える今日この頃です。この場では、皆様への御礼の念と、今までのこと・今後のことについて、簡単ではありますが、述べさせていただきますと思います。

今年度04年は、多くの新規入会者を迎え、装いも新たに好スタートを切ることが出来ました。私は今年度を、当委員会の分岐点と感じ、より一層の意気込みで活動に取り組んできました。もちろん全てがうまく事を運べた訳ではなく、苦勞した点・苦悩した点はたくさんあります。ですが、どんな時も仲間と力を合わせ、より“上”を目指し活動してきましたつもりです。不安だらけで始めた新たな取り組みも、皆さんの助力あってか、うまく事を進めることができたと思っております。一つ一つの取り組みについての今年の状況は、皆様もご存知の通りだと思いますので、ここでは割

愛させていただきませんが、全て取り組みに積極的に参画してきてくださった皆様のおかげだと、頭を下げてでも下げてでも足りない程の想いを、常に抱いております。

学生だけに限らず、今年度は多くの教職員の協力も得られました。それにより、大学の施設・設備は改善の方向に向かっていきますし、障がいを持った学生が対象の講義に関するシンポジウムさえも開催されるほどでした。「障がい」というものを、幅広く捉え、対応できるというものが、私達バリアフリー委員会である、様々なバリアが未だに、大学・社会に数え切れぬ程残っているがために、障がいを持った学生が情報を得ることや、社会参加することを阻まれているという現状を理性的に捉え、「バリアなき社会」を目指し、日々活動しなければならぬと、私は考えています。

今年に入り、多くの面で、良い方向に向かっているのは感じていますが、今後の対応も考える必要があります。例えば弱視・盲・重度の肢体不自由者が入学してきた場合への対処。現在、本学では、聴覚障がい者への対処は整っています。車椅子学生からの要求も少しずつ受けられるようになってきて、改善の色は見られています。しかし、盲・弱視・重度肢体不自由が入学してきた場合の対処は全くもって整っていません。拡大コピー機能もなければ、ガイドヘルパーもない。家までとは言わないにしても、駅から大学までの、車椅子補助のボランティア制度も整っていません。「大学側としてやらなければならない」こと、そのためにはバリアフリー委員会が積極的に活動に取り組み、大学側に認識していただき、大学をハードの面だけにとどまらず、ソフトの面。施設・設備だけではなく、きちんとした制度として確立していく必要があるように思いますし、そうすることが、誰もが何不自由なく大学生活を送れる環境を創り出すことに繋がってい

くのだと、私は感じます。

ようやくそれぞれの活動が軌道に乗り始めた感を受けてはいますが、まだまだ問題は絶えず、これからおそらくは消えることにはないと思います。これからも、どんなことが起ころうとも対処できるような体制を整えると共に、新たな問題点を自ら探し、改善・解消していく、そんな団体を目指していただきたい。そのためには、皆さんの御理解・御協力がなければ、成せる事も非であると感じています。登録者一人一人がそれぞれの活動の中で、やりがい・生きがいを見つけることが出来る、卒業する時に「バリアフリー委員会に入って良かった」と、口を揃えて言っていたけるような団体を目指していただきたい。そして、そう成る事を、願わずにはいられません。

最後に：・勉強にしても全てにおいて言えることですが、墮落した生活を送っている学生・毎日充実した生活を送っている学生。活動に積極的な学生・悲しいことに消極的な学生。色々な人がいる中で、皆さんはどこに視点を置いているのでしょうか？「上を見ればきりがなく、下を見てもきりはない」人は一人では何もできない無力な生き物、できることなら、皆で力を合わせて、上を目指しましょう。「One For All All For One」一人はみんなのために みんなは一人のためにこの精神は、大変重要なことだと痛感しています。それぞれが、自分のことではなく、いつでも皆のことを考え、自分にできることを探し、今自分にできることを少しずついいから、こなしってほしいと思います。

人生・活動について考えること、バリアフリー委員会を通しての出逢い・活動に「無駄」ということはないと思います。考えることは、自分の思慮を深め、より高き場所へ自分を導いてくれるはず。星の数のようにある出

逢いの中で、ここまで深くなれる仲間と出会ったということは、これからの人生においての絶対の宝物になるはず。何十億という人の中で、巡り会い・話すことができたということは、奇蹟と言っても過言ではないはず。これからも、この出逢いというのは大切にしてほしい。自分が辛いときは、仲間が支えてくれるはず。同じように、仲間が辛い時には、自分が支えてあげたいと思うはず。この支え・支えられる、持ちつ持たれつという関係を作っていくということは、そう簡単にできるものではありません。しかし、このバリアフリー委員会という同じ意思を持った仲間が集まっている団体であれば、それは不可能ではないと思います。人間、誰しも完璧ではない。欠けている部分というのは、皆持っていると思います。それを見つければ、埋めあい、よりよい高き人間を目指す。これぞ人間関係において、人間が生きる人生においての醍醐味というものではないでしょうか。お互いが支えあい、刺激し合い、時間を共有し、高めあい成長していくものだと私は思います。こう思わせてくれる皆に出会えたことが、私の中の宝物であり、人生の中での奇蹟なのかもしれません。

心からありがとう。そして、これからも宜しくお願いします。

「貴重な思い出が貯まった」

我が母校・SGU」

社会情報学部社会情報学

4年 工藤 努



2001年4月に札幌学院大学へ入学して、あつという間に4年が経ちました。また、あと2ヶ月で卒業式を迎えます。入学して以来4年間を振り返ってみると、時の経つことが実に早かったように思えてきています。この4年間にバリアフリー

ー委員会、課外活動（硬式野球部）を通して、色々な人と出会うことによつて、やはり自分は成長したんだとつくづく感じることも多くあります。

私は、札幌学院大学に入学して本当に良かったと思います。本学に入学する前までには、楽しみと不安という複雑な気持ちでしたが、私と同じ障がいをもつ先輩が本学に在学していたということもあって、先輩に頼りながら学生生活を過ごしてきたという感じでした。でも、先輩が卒業した後、聴覚障がい生が私だけ一人になったということで、これからは気を引き締め、また将来本学に入学してくるかもしれない聴覚障がい学生のために「ノートテイク又はPC通訳活動」を意義あるものにしようと残り2年間の大学生活を全うしていきたいと思つて色々活動してきました。また後輩が本学に入学してきて「本学に入学してよかった」と言えるようなバリアフリー委員会を作らなければと強く意識するようになりました。このように4年間、講義保障をしてもらうだけでなく、手話学習会や交流会、

スポーツ交流会を企画するなど活動に関わってきたということで、精神面がさらに強くなったのではないかと思います。

ところで、本学に聴覚障がい生のために講義保障をするボランティアが存在することを初めて知ったのは入学前のことでした。それは私が入学する前に私と同じく2年先輩の聴覚障がい生が本学に在学したということであつて、当時法学部の藤懸久明さんという4年の学生が「情報保障ボランティア」という団体を設立し、聴覚障がい生に対する講義保障をするというノートテイク制度が組まれていたからです。2年先輩の聴覚障がい生の話によると、大学入学当初は、ノートテイク制度とは縁遠く、講義保障さえも知らない状況下で、自力で受講してきたそうです。しかし、先輩が所属していた学部の講義は想像以上に難しく追試験もなくて留年の多い学部なので、講師の発言が聞こえない状態で単位を取ろうなど無理なことは火を見るより明らか、成績は芳しくなかったようです。私も入学後初めて講義にノートテイクをつけてもらいましたが、教授の講義内容が想像以上に濃い内容であつたので、ノートテイクをしてもらったおかげで講義内容を理解することができました。ノートテイクなしで講義の話を知ることができないような聴覚障がい生にとって不利だと初めて感じさせられました。だから、その先輩の気持ちを私ら聴覚障がい生は理解することができません。

それ以来4年間ノートテイクカーまたはPC通訳者付きの講義を受けてから単位も徐々に取得していくことができ、今では今年の3月に卒業を迎えることが出来る自分があります。

入学年当時は、現在の委員会の運営とは全く違って、本当にメンバーが少なかったのです。また、大学から希望どおりの予算をつけてもらえないことができなかったり、こういう極めて厳しい状況にある中で、その当時メ

ンバーたちは、全くの無償ということにも関わらず、私ら二人のために講義保障をして下さりました。本当に感謝で一杯でありました。またこの当時メンバーの一生懸命頑張ってテイクをする姿に感服させられました。

2002年度に、これまでの3年間の活動に賛同してくれた教職員が集まり、型を「バリアフリー委員会」と変え、新体制となりました。活動内容は、設立当初と同じ、私と2年先輩の聴覚障がい生に対する講義保障をするということでありました。学生主体の活動ということなので、教職員は代表者ではなく、世話人という型で活動を指導して頂きました。現在の世話人は社会情報学部教員で、しかも私が所属しているゼミの先生でもある新國三千代先生ですが、当時の世話人は、僕と同じく障がいをもつ2年先輩が所属していたゼミの担当教員である法学部教員の南隅基秀先生でした。このような団体を設立して以来、現在のバリアフリー委員会があります。現在に至るまで、私のような聴覚障がい学生へのサポートをするだけではなく、肢体不自由学生へのサポートなど新たな活動を取り入れるなど色々と変わりつつあります。もともとは聴覚障がい学生のために講義保障をするボランティア団体であったのだから、ノートテイクまたはPC通訳活動がさらに発展してくれると私はそう願っています。

このように4年間色々な思い出が、コップが1杯になるほどたくさんあった本学と別れるのが寂しくて本当にたまりません。もっと本学にいたというのが本音です。入学する前までには、大学生活などが楽しみだという気持ちはなかったのですが、実際に入学してみると、嘘のように大学生活が毎日のように楽しくて、また聴覚障がいの私を理解してくださる人々が多くいらっしやってくれて本当に感謝できないほど一杯でありました。私のような障がい者も健常者と平等に講義を受けてくださったり、また健常者と同じ人間として、喜び、学び、楽しさ、怒りなどを素直に分か

ち合うことのできた本学と出会って大変満足しております。皆さんとは、ノートテイクまたはPC通訳活動を通じて知り合うことができました。これは私にとって貴重な出会いであったと思います。活動を維持していくなかで、お互いに得るものがあつたと思うし、人間的に何らかの形でプラスに成長していくことができた気がするからです。こうして自分発見ができたし、何より皆さんと出会えて本当によかったです。私たちが今まで築いてきたものを、後輩たちやバリアフリー委員会が継承してくれるものと確信しています。また、皆さんが卒業する時期を迎えたとき、「バリアフリー委員会に入ってよかった」といえるような委員会をつくりあげてほしいものです。障がいをもった学生のためにサポートするだけではなく、障がいをもった学生と「共に考え、共に取り組み、共に生きる」ということができるような団体を目指してほしいです。そのほうが、お互い様大きく成長することができるのではないかと思われまます。

最後になりましたが、本学学長・布施先生をはじめ、私の所属していたゼミ担当教員でもあり、または恩師でもある新國三千代先生、4年間教職関係で大変お世話になって頂いてくださった人間科学科教授・高橋渉先生、4年間野球指導または課外活動以外で色々相談にのって頂いてくださった硬式野球部監督・広嶋進さん、そして、4年間講義保障にあたってご協力して下さった教職員の方、3年間という長い付き合いがあつたバリアフリー委員会リーダーの宮町君とサプリーダーの長谷川君、またその他のメンバー皆様へ、4年間本当に有難うございました。皆様の今後の健闘を祈り申し上げます。さようなら。